
ブラック・ハート

樹璃庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック・ハート

【Zコード】

Z7584A

【作者名】

樹璃庵

【あらすじ】

『院』と呼ばれる秘密組織の一員と、ただの高校生の超お嬢様の
どたばた?ストーリー。

プロローグ

『壬生影正』、俺の名前……

今は高校生してる……けど本当は違う。

この世には妖魔って呼ばれてる異形のものがいる。

そして、その妖魔を倒すのが俺たち、『院』と呼ばれる組織の、力

ツコ良く言えば戦士・悪く言えば駒だ。

そこでなぜ俺が学生やつてるかって言うと、もちろん院の任務だ、それに院にいるやつは最低大学卒くらいの学力くらいもってないとやってけないから高校なんかにいかない話に戻ると、俺の今の任務は護衛だ。

それで、今守つてるのは俺の隣の席にいる、『涼風実』だ。

昨日転校してきた噂の子だ。

(・・・確かに話題になるな)

俺の正直な気持ちだ。

なぜ俺がそう思うか?そりゃ思ひだろ?

昨日のことだ。

彼女は昨日いきなり転校してきたのだ学期の初めでもなければ、学年の初めでもないのに。

そして、俺にはほかにおかしいと思ひところがある。

彼女は教室に入つて、教壇に立ち、自己紹介があつて、席につくまで異常にあたりを見回している。

普通に見ればただの転校生のキヨドリとなるといひだが俺には何かから逃げてるような感じに見えた。

当たつた……いや、当たつてしまった。

その日、学校が終わつて家に帰ると、

家の前に大きなりムジン。

俺は不思議に思いながらも家の中へ入つてみることにした。

「かえつた・・・・」

いわゆる俺流の『ただいま』だ。

「おかえり～！」

「おかれりなさい」

未だひとつの出題え。

h
?

妹かしるなんて隠してなしたって？

ニアん・・・仕様が無い。じゃあ紹介しよう。

以上。

とにかくで、思えば靴が2つ増えてる気がする、いや増えてる

誰かしるの？

聞いてみた

卷之三

「そ'うか」

—そ、う、たん！

と会話を交わして居間に入ってみると、そこには見覚えのない2人がいた。

女の子。

「誰？」

と挨拶もなしに問い合わせてみると。

たのか疾目で振り返る少女と、

平然とした顔でこちらに振り返る執事。

華亭とソ女は二人通じ現田で、くにじに力

と、先に口を開いたのは執事のほう

うん、そう・・・

「あ、あなた、壬生君でしょ？」

と俺の言葉をさそぎり問うてくる少女（最後の「だよ」をいいたかった）。

「俺のこと知ってるの？」

「知ってるも何も、同じクラスじゃない」

「そうなの？」

「お嬢様、この方をご存知なのでですか？」

執事の問いかけに少女が

「うん、学校の同じクラスになつて隣の席にいる壬生影正君。休憩時間に学校案内してくれたわ」

そこで俺は「はっ」つとなつた。

「お、お前は・・・」

少女の期待の表情、執事の無表情。

で、結論

「だれだ？」

うなだれる少女と執事、執事も実は期待していたのだ。

「本当に覚えてないの？」

聞かれる

「うん」

答える

少女ため息

執事の無表情

俺考える

妹”sの応援

「あ、思い出した」

少女の喜びの表情と、執事の無表情と、妹”sの歓声

「涼風実だ、転校生の」

実のうれしさのあまり泣きそうな表情と執事の無表情と妹”sの大歓声。

「で、その涼風実さんはおれの家に何をしごきたの？」

問うと執事が、

「それは私がお話いたしましたよ。」

「うん」

そして、10分ほど話を聞いてわかつたことがいくつか。

まず、この少女涼風実が3ヶ月ほど前から妖魔に狙われ始めたこと。

それと、その妖魔は並みの武器では歯が立たないこと。

そして、その妖魔は昼夜問わず寝込みも襲つてくるらしい。

「つまりあんたちは俺に守りと退治の両方を依頼したいんだな？」

「はい」

緊迫した雰囲気が居間をつつむ。

そして、

「OK、わかった」

喜ぶ執事と涼風実。

「だが、値が張るぜ？」

その一言で居間はまた緊迫した雰囲気になった

「わかっている・・・いくらだ？」

執事の問いに影正は笑いで返した。

「な、何がおかしい」

「へへ、金なんていらねえよ

「なに！？」

「初回サービスってやつだよ」

「「「「サービス！？」」「」」

「そうだ、生活費も十分に足りるしたまにはいいだろ？..」

「はあ」

困惑する執事。

「だだし！条件がある」

この言葉に四人は口をそろえて「条件？」といふ

「そう条件だ」

「条件とは？」

執事が言うと影正は笑顔で「うう」と言った。

「そこ」の女はつむちで預からせてもらつた

その一言で執事は憤怒の表情をして怒声を影正に浴びせた。
「そ、そんなことができるわけがなかろつー。」

耳を押さえながら影正は、

「そうか、わかつた、じゃあいいや、ほかあたつてくれ」
その一言に執事は「こちらから願い下げだ」と言つて部屋を出ようとしたが実の一言によつて足を止めた。

「お嬢様、今なんとおっしゃいましたか？」

執事の問いを無視して実は

「本当にそれだけでいいんですね？」と、影正に問いかけた。

「生きたければな」

少し考え方実は

「わかりました」と、言つと執事に向かつて「うつ語つた

「聞きましたね『赤松』」

と、にこやかに執事に問いかけさりとづけた。

「そういうことだから私はしばらくの間、家には戻らないと、お父様によろしく伝えてください」

実際に言われ執事『赤松』は苦悶の表情で「かしらまりました」とだけ言つて家から出て行つた。

「と、言つことで、ふつかものですがしばらくの間よろしくお願ひしますね」

と、言つて笑顔を見せる実に灯と光が「「なんだか嫁入りに来た新婦さんみたいですね」」と言われ実は

「ふえ～！？」と奇怪な声をだす。

それから数時間後、赤松が実の着替etcを持つてきた。

そして、「お嬢様にもしものことがあつたらただではすまんぞ」と、言つて帰つて行つた。

「もしものこと、ね」

そつづぶやいて居間に戻つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7584a/>

ブラック・ハート

2011年1月16日15時41分発行